

琉球大学学術リポジトリ

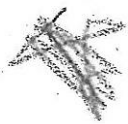
岸総理大臣第1次訪米関係一件 会談関係

メタデータ	言語: 出版者: 公開日: 2019-04-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: - メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/44205

(6) 日米借款交渉の経緯

外考

米側との接触



A. 15. 2. 4 - 3

日米借款交渉の経緯

(三二年七月一日)

(福田村夫議員報告)

米側との接触

總理一行は六月十九日ワシントン到着、初日の十九日は總理とアイクとの会談、第二日の二十日は總理以下当方代表全員とダレス以下米側首領との会談、第三日の二十一日は岸ダレス会談、岸アイク会談が行はれ、同日夕刻共同声明の発表となつた。

私は~~私~~十九日一行のワシントン到着後總理がアイクと会談中の寸暇を利用し、財務次官パーゼス氏と会談し、借款諸問題をもち出し、總理借米中に米側並に國際機關と借款の話し合いをしたいが、これに対し協力せられたいと申し入れた。特にこの会談で私は日本經濟の基本的動向が極めて健全なることを強調し、その生長が余りにも急激に過ぎたことが、今日些細の事態を生じたる旨を力説し、~~高~~政府は総合対策を以てこの事態の克服に努力してゐる旨を述べたのに対し、パーゼス次官は、

✓

昭和二十八年のときは六ヶ月で問題を解決した日本のことであるから、今日のことについて、いさゝかの心配もしてゐないとのことであり、出来る限りの協力をすることであつた。

二十日の岸総理以下当方代表全員とダレス以下米国首脳との会談に於いては岸総理から更めて日本経済の現状を説明し、尙日米経済協力に今後共推進し度いと述べたのに対し、米側も同感の意を表し、特に列席のウォーワシントン輸出入銀行総裁は輸銀から日本への借款問題については総理滞米中に結論を出す積りであると発言した。

私は少々驚いたのである。借款問題は総理訪米中に口火を切つて、大体の方向だけを定めて置いて、帰米後別の使節団でも送るのがよいと考へてゐたし、総理もその様にするか、又は君が残つてゐて日本から誰か応援に人を出すことにするか一のこととて滞米の一週間で事が片着くとは予測しなかつた。

かくて、三十一日私は順次ワシントン輸出入銀行ウォー、世

界銀行ブラツク、國際金融公社ガイナー、國際通貨基金のヤコブソンの各總裁と會談した。

輸銀に付いては一億七千五百万ドルの短期借款供与と、長期借款に付いても当方申出のものに付いては逐次、進行せられ度き旨の要請をした。ウォー總裁は十分検討するが、日本政府に於ても、該短期借款を以て買入れる品目や、資金の必要の時期等を検討することを要請され、更めて二十五日會談することを約した。

尙ブラツク總裁に対しては同總裁訪日中日本に於いて池田蔵相から申入れた諸案件（電力、製鐵、高速道路）に付いてその後検討の結果を訊したるに對し、何れも計画としては可なる様考えるから、具体的な実施プランを提出する様にこのことであり、ガイナー總裁に對しては國際融資公社の融資が、南米に片寄りある事實を指摘し、今後アジアに特に關心を示され度き旨を述べたるに對し、適當な計画あれば、協力する旨の回答であ



つた。

又ヤコブソン通貨基金総裁に対しては日本の通貨基金よりの外貨入手一二五百万ドルに付いて総理対米中結論を出されたいと申入れたのに対し、目下努力中であると、極めて好意的であった。

以上同日の米国並に国際の金融各機関の動向に付ては政府にもこれを伝え、これに対する政府の意向を訊したるに付し、政府はこの際成るべく好い条件で、成るべく多額の外貨を獲得する様努力されたいとの意向であつた。

約に従い、私は紐育滞在中の岸総理一行を離脱し、二十五日ワシントンへ帰り、ワシントン輸出銀行ウォーレン総裁と会見した。この会見に於いて、ウォーレン総裁は米国輸出入銀行と世界銀行との対日長期借款に関する分野を明確にしたいと持ち出し、当方もこれには、政府と相談の必要ありとして、この会見は短時間で打切りとした。

抑々^抄長期借款に関する輸銀と世銀との分野に關しては前々から機微な問題が伏在してゐるのである。

日本側が政府保証で輸銀からあまり多くの借款をするということでは、懸案の電力、織、道路に關する借款へインパクトも打切りとならざるを得ないというのが、世界銀行の考え方であり、日本の輸銀借款に依る米品輸入が世界銀行の考え方で不当に制約されることは困るとするのが輸銀の考え方である。

世銀と輸銀との間に狭つた我々の立場も困るのである。政府とも連絡の上、二十七日午前十時先づパイズス財務次官と金談して両行間の調整を依頼した。パイズス次官はよく調整の努力をしてくれたものゝ如く、同日午前十一時のウオーシ總裁との金談では話は順調に進行し、一七五百万ドル当方要請通りの借款が大体承認された外、長期借款についても、輸銀として好意を以て考え、且今後比較的少額の借款は民間銀行保証ベースで行うという方針も明確となつた。

又、同午后三時半のブラツク總裁との会談でも、予想外の円満裡に話し合いが進行し、日本政府側から政府としての長期借款計画を出してくれとの話で、これで世銀と輸銀との間の困難な調整もどうやら、財務省の仲介で話がついて来たようである。同日午前の国際通貨基金に於ては日本に対する一二五百万ドルの米貨借与が決定された。

かくとて、この日午後五時再びウォー輸銀總裁と短期借款に付いての細目の打合せを行い、条件等を協議し、一切のことが決められたのである。

一七五百万ドルの輸銀借款と一二五百万ドルの国際通貨基金の米貨借与で、日本は三億ドルの外貨を獲得することとなつたわけであるが、これは外貨問題で苦境に立つた日本経済に多大の貢献となるものと考えられる。

ニ 借款の内容

今回の借款は主として短期資金に関するものであり、長期資

金に付ては今後の進行が推進されたのである。

今回の借款は輸銀一七五百万ドルと国際通貨基金一二五百万ドルであり、併せて三億ドルになる。この内国際通貨基金の方は秘密に言ふと借款でない。即ち円売り弗買いである。輸銀の方は秘密な借款であつて、総額一七五百万ドルの内六〇百万ドルは既存の棉花借款の借替分、残りの一一五百万ドルは棉花・穀類（豆を含む）の買入に便はれるもので、その割振りは今後兩國政府間で協定される。利率は何れも年四分五厘である。

三 外貨の手当を必要とする日本経済

過去二ヶ年に亘つて奇蹟的な発展を示した日本経済は表面的には引続きその拡大発展を続けつゝあるが、本年に入つてから国際収支は漸次悪化の傾向を示した。特に國金に於ける予算審議終了後に於ては四・五の二ヶ月で三億ドルの外貨を喪失する様になり、外貨の年末保有高十四億ドルは五月末には十億ドル以下に激減した。これは兩年に亘る経済好況に刺激されて、國

内の投資が予想以上に旺盛となつたことに原因し、この儘放つて置くと外貨の喪失は暴増し、遂に日本は早晩恐らく本年末頃には國際収支の面での破産國となり、日本經濟の生命線である外國貿易の運営にも支障を生ずる事象が生ずることも阻れられるに至つた。事態は昭和二十八年のそれと非常に似て來てゐた。

日本經濟の現状に対し、一番憂慮してゐるのは日本中で恐らく池田首相その人であらうと思ふ。首相とも、渡米前屢々會談したが、深い憂色が窺はれる。首相はこの際國際通貨基金からの借入も実現したいし、米國や國際融資機關などから、支援を得度いとの意見があつた。

東南アジアから離られ而もすぐアメリカへ出發する準備で目の廻る様に多忙の岸總理にも、私の見る日本經濟の現状を報告した。總理も首相や私の考えと同じ様に、この際外貨を導入すべきであるとの結論である。

そこで、私は首相の隨員として渡米中に、借款問題を持ち出

し、米側の大体の了解位は取付けて見たいと決意するに至り、その為特に随員に大蔵省の西原財務官の同行を要請した次第である。

然し外国へ行つて、唯単に金を貸してくれと言つても、そり易々と成立するものではない。一番大事なことは、金を借りて返済出来るかと言ふ問題であり、返済する為には借りた金が効力を發揮して日本経済が、早急に立直らなければならぬといふことである。岸総理が渡米直前開議に於て日本経済立直りの為め総合対策の樹立を指示したのはこの意味に於て機宜の措置であつた。

四 借款は何故成功したか

今回かくの如く多額の借款が極めて短時日の間に成立したのは我々さえも予想外とするところであり、ワシントン、ニューヨークの財界人も驚異的事実としてゐる。何故この様な成功が齎らされたのであろうか。

第一には、それは米國政府の岸総理に寄せた好意であることを忘れてはならない。日本保守政権のホープとしての岸総理に対し出来得る最大限のサーヴィスを惜しまないとする米政府の動向が強く今回の成功に影響してゐるのである。

然しそれだけではない。成功の第二の理由としては米國並に各國が日本經濟の現状を基本的には健全なものと判断し昭和二十八年の危機も乗切つた日本が必づや今回の難局を打開するであろうと確信し、今まで日本は確實に借款を払つて来たから、今度の借款の償還にも些の不安も拘かぬということである。特に政府の採りつゝある総合対策が、この様な各國の考え方の最大の基礎となつてゐる。

即ち今回の借款は保守政権がこの総合対策を確實に実行するといふ信頼に基いていふ言えるのである。

借款の成立は日本經濟の現状を打開する上に大きな役割を演ずるであろう。然し、大事なこととは、この資金を徒食してはな

らなやということである。この資金を基として、更に日本の輸出を伸すと共に、不要不急の内需を節し、国際収支の赤字を一日も早く解消し、且なるべく速かに短期借款を償還することである。

私はこの借款の成立を見た今日に於てはもはや日本経済の前途に不安は抱かない。然しそれには前提がある。決められた総合対策が着実に実行されるということである。政府と党とが一体となつて、総合対策を強力に推進されんことを切望して已まない。